

令和6年 大学院国際交流旅費補助による出張報告

◇学会出席・発表目的による出張者（1～6）

掲載順	出張者	出張期間	出張先
1	平井 優香 (博士前期課程2年)	令和6年9月14日～令和6年9月17日	中華人民共和国天津市
2	近藤 貞祐 (博士後期課程3年)	令和6年9月14日～令和6年9月17日	中華人民共和国天津市
3	北村 規子 (博士後期課程3年)	令和6年9月14日～令和6年9月17日	中華人民共和国天津市
4	藤原 美樹 (博士後期課程2年)	令和6年9月14日～令和6年9月17日	中華人民共和国天津市
5	神村 友大 (博士前期課程2年)	令和6年9月14日～令和6年9月17日	中華人民共和国天津市
6	松本 佐和子 (博士前期課程2年)	令和6年9月14日～令和6年9月17日	中華人民共和国天津市

◇研究調査目的による出張者（7～8）

掲載順	出張者	出張期間	出張先
7	斉藤 彩香 (博士後期課程2年)	令和6年2月6日～令和6年2月15日	フランス / パリ・トゥール・ナント
8	富田 綾美 (博士前期課程2年)	令和6年11月1日～令和6年12月26日	台湾 / 台南市、高雄市

【1】平井 優香

〔出張期間〕

令和6年9月14日（土）～令和6年9月17日（火）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）

中華人民共和国天津市

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕

國學院大學・南開大学院生フォーラム「第10回東アジア文化研究国際シンポジウム」

〔報告事項〕

報告者は、令和6年9月15日に天津市の南開大学で開催された「第10回南開大学・國學院大学院生フォーラム東アジア文化研究シンポジウム」にて「現代の羽子板における『藤娘』の表象」というテーマで研究発表を行った。

「藤娘」は、東海道の宿場である大津で旅人に土産物として買われていた絵画「大津絵」の主要な画題「大津絵十種」の一つとして知られている。大津絵の人氣が高まり、大津絵から舞台芸能へ題材として登場するようになった「藤娘」は、その人氣を加速させて舞踊人形や羽子板などの造形物にもモチーフとして取り入れられていった。

このような歴史的背景から、報告者の研究テーマである「藤娘」の表象については、芸能史研究や美術史研究の視点のものが存在するが、それらは大津絵「藤娘」に注目し、大津絵以前に「藤娘」がどのような姿であったかを探る内容となっている。古井戸秀夫は、「藤娘の成立」（『近世文藝』51号日本近世分学会1989年）に舞台芸能としての「藤娘」の人氣ぶりについて述べているが、先述したように、大津絵から舞台芸能を経て人形や羽子板などの造形物に描かれるようになったが、「藤娘」像の変容や羽子板における「藤娘」の姿について論じたものは管見では確認できていない。

そこで、羽子板における「藤娘」の表象を探ることの第一歩として、2023年12月17日から19日にかけて開催された「浅草寺歳の市（通称：羽子板市）」で確認した「藤娘」の羽子板を分析し、現代の羽子板における「藤娘」の姿を明らかにすることを目的として報告者は本発表を行った。

本発表で明らかになったこととして、以下の四点が挙げられる。

第一に、衣裳の面で特に歌舞伎舞踊「藤娘」からの直接的な影響が見られたことがある。大津絵「藤娘」は黒を基調とした衣裳であるのに対し、歌舞伎舞踊「藤娘」は演目の中で衣裳が次々と変化し、大津絵「藤娘」の衣裳と比して華美なものとなっている。変化して

いく多様な衣裳については、同様の配色の衣裳の事例が多く確認された。このことから、羽子板における「藤娘」の衣裳には、大津絵「藤娘」からの直接的な影響はなく、歌舞伎舞踊「藤娘」からの影響が顕著に表れていると言える。

次に、笠と藤の描かれ方が多様である点にある。笠を被り藤の花房を担いだ大津絵「藤娘」と歌舞伎舞踊「藤娘」とにも見られる姿の他に、笠を被らずに手で持った事例や、笠を描かず藤の花房もなく髪飾りとして藤の花を身に着けている事例などが確認された。このような多様な描かれ方が見られる背景としては、歌舞伎舞踊「藤娘」は演目の中で笠を脱ぎ、藤の花房も持たずに踊る場面が存在していることが背景にあると考えられる。この結果は、大津絵の画題から舞踊演目化した際に、役者の動きによって多様な姿を見せるようになった「藤娘」が身体性を獲得したことを示している。

第三には、笠に藤の花が描かれた事例を複数確認したことである。大津絵「藤娘」と歌舞伎舞踊「藤娘」において、笠は無地の黒笠である。そのため、大津絵、歌舞伎舞踊には見られない羽子板における「藤娘」の特徴が存在することが明らかになった。

第四点には、藤娘の顔についてである。押絵羽子板において、顔にあたる部分は「面相」と呼ばれる。この面相については、丸顔で女性的な顔立ちの者が事例の9割以上を占めていた。押絵羽子板は、文化文政期に歌舞伎役者のプロマイドとして制作されて人気を博した経緯があるが、役者である男性を描いたと思われるような面長で切れ長の目をした事例はわずかであった。これは、歌舞伎役者のプロマイドとしての要素が現代では薄れていると言える。

以上のように、発表では羽子板における「藤娘」の多様な姿があることを示し、その背景について考察することができた。研究発表会当日、会場へ「藤娘」の押絵羽子板を一点持ち込み、実物を示しながら発表を行った。そのため、研究発表後の交流の場で南開大学の大学院生の方々と話が弾み、活発な交流を行うことができた。

交流の場では、南開大学の大学院生から「来年は國學院大學が会場ですね」、「日本でまた会いたいですね」といったお声をかけていただき、感謝するとともに、次年度の國學院大學での開催では自分自身も協力をしたいと考えている。

【2】近藤 貞祐

〔出張期間〕

令和6年9月14日（土）～令和6年9月17日（火）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）

南開大学（中国天津市）

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕

國學院大學・南開大学院生フォーラム「第10回東アジア文化研究国際シンポジウム」および天津市内臨地研究

〔報告事項〕

令和6年（2024年）9月15日に中国天津市の南開大学にて行われた「第10回国學院大學・南開大学院生フォーラム 東アジア文化研究国際シンポジウム」に研究発表のため参加した際の所感と、天津市滞在中の一連の現地調査の内容を報告する。この度の訪中は、当シンポジウムを中心とした9月14日～9月17日の4日間の渡航計画で、15日の研究発表、16日の臨地研究、市内見学が主要な行程であり、初日と最終日は移動日というような内容であった。

15日 シンポジウムについて

当日は8時半の開会式より始まり、外国語学院棟の前で記念撮影が行われた。午前中は両大学の教員方による基調講演が行われ、國學院大學からは諸星美智直教授（遠隔）と安西晋二准教授が登壇された。午後より、大学院生による研究発表が2分科会により行われ、両大学の学生が混合でそれぞれ研究発表を行なった。報告者は、「盆行事としての虫送りによる鎮魂一天竜区水窪町の念仏踊りを事例として一」という題で、これまで研究テーマとして取り組んできた虫送り行事と静岡県浜松市水窪町の盆行事の関係について研究発表を行ない、また、冒頭では虫送りの中国伝來說など中国との関わりについても言及を行った。当分科会は時間管理に誤りがあり時間が随分押したため、予定されていた質疑の時間が取られなかったのが残念であったが、南開大学の学生の研究は、どの発表も日本の諸文学、文化に対する繊細な分析が見られ、國學院大學の教員らの質疑に対しても熱心に受け応えをしていた姿が印象的であった。シンポジウムの閉会後は、南開大学内の会場において懇親会が行われ、外国語学院の学生らと交流を行う機会があり、シンポジウムや両国のカルチャーの話などさまざまな話題で歓談することができた。

16日 天津市臨地研究、市内見学について

16日の市内見学では主に二つの施設を訪問した。一つは、天津市の北端にある「黃崖関長城」、いわゆる「万里の長城」の天津セクションである。ここは隋代に創建され、東は河北省遵化県の馬蘭峪長城、西是北京平谷県の將軍関長城へとつながり、1987年に天津市

により再建され、全長は約42キロほどあるとのことである。滞在中のホテルからマイクロバスで3時間ほどかかる天津市の郊外にあり、休日ということもあって多くの観光客が訪れていた。軍事的な戦略拠点であったということもあって、城内は入り組んだ構造をしているばかりでなく、上下にも高低差があり階段の上り下りだけでもかなり体力のいるものであった。山沿いに伸びる長城のメインとも呼べる石造りの道は、さらに高低差の激しいもので、部分によっては絶壁とも呼べるほど角度が急峻なところもあり、滞在できる時間が短かったこともあるが、学生は200~300mごとにある敵台と呼ばれるポイント地点の建物を3つ程度行ったところで引き返した。それでも、立地自体が高所なこともあり、長城から望む山脈の景色は大変壮観なものであった。

昼食を挟み、もう一つの行き先である「独楽寺」を訪れた。ここは国内に3カ所現存する遼代寺院の一つで、国内最古の高層木造楼閣式建築であるとのことであり、内部には高さ16メートルの観音菩薩泥塑立像「十一面観音」が安置されている。境内では他にも、中国独特の建築様式の建物や文様などの装飾は目を引くものがあり、一方、鴟尾や金剛力士像などもあり、日本の寺院との共通点や差異などにも考えさせられるものがあった。

滞在中について

この度の訪中では、滞在期間中を通して南開大学方があらゆる行程を手配して頂いていたおかげで、國學院大學からの参加者は初日から最終日まで中国でも何不自由なく行動でき、特に終始尽力して頂いた王凱副教授にはこの場で改めて深く御礼を申し上げたい。移動については、到着した北京空港から天津市までの車で3時間の行き帰りの道程から、ホテルから南開大学まで、1日がかりの天津市内の見学等まで全てマイクロバスでの送迎があり、旅先では不可避な交通手段の不安は全くの皆無であった。食事についても、滞在中のホテルでの朝食以外はほぼ全て手配して頂いており、日本の中華料理とは一味も二味も違う現地の食文化を十分に堪能することができた。また、日本文学専攻の外国語学部との交流であるとはいえ、先方がこちらと会話では全て日本語で合わせ、現地の方とのやり取りについても誰かしらが間に入って通訳を行なってくれたため、何より問題であった言語の問題についても、不自由なくコミュニケーションをとることができ、滞在中先方のあらゆる「熱烈歓迎」に幾度となく感服する想いがあった。また、以前より交流があり、前年の第9回シンポジウムの際にも共に研究発表を行なった胡曉暉氏、令和6年度に本学の課程博士を修了された李生智氏、南開大学の張競文氏と葛慧俊氏には、南開大学の学生との交流の取り持ちやキャンパス内の案内、16日の天津見学等を先導して頂き、おかげで非常に良好な交流や体験をすることができた。各人にも改めて深い感謝の意を表したい。

[参考文献]

- ・ふれあい中国「黄崖関長城」(<http://www.chinatrip.jp/tianjin/attraction/attraction-624.htm>, 2024.10.01閲覧)
- ・新華網日本語「貴重な遼代寺院 天津の独楽寺」(<https://jp.news.cn/20230815/97c2e3e7b2b7482a6866cfb4d17/c.html>, 2024.10.01閲覧)

【3】北村規子

[出張期間]

令和6年9月14日(土)～令和6年9月17日(火)

[出張先](国/地域・都市等詳細)

南開大学(中国天津市)

[学会名称、調査地の地名・施設名等]

國學院大學・南開大学院生フォーラム「第10回東アジア文化研究国際シンポジウム」

① 発表内容

今回発表したテーマは「津波の語り—三陸地方の津波石—」である。

津波によって海から陸へ打ち上げられた巨石を津波石という。その存在が世に知られるようになった発端は、八重山列島の石垣島等に点在する巨石を調査した牧野清が、それらが津波によって海から陸上に打ち上げられたと推定し、1968年に著した『八重山の明和大津波』で「津波大石」と呼んだことによる。

東日本大震災でも話題となった津波石がある。岩手県大船渡市の吉浜、外口、田野畑村羅賀とハイペ海岸、宮城県気仙沼市唐桑の計5か所である。

岩手県大船渡市吉浜は、過去の津波体験から高所移転に成功した集落であり、海の近くには田んぼや畑が広がり、住居は一段高い所に建設されている。吉浜の津波石は昭和8年の津波であがり、その後、道路拡張工事で埋め立てられた。2011年、津波石の周辺で遊んだ記憶のある地域の方が「この辺に津波石があった」「津波が来たらまた姿を現すだろう」と話していたその日に震災が起きた。震災後の6月、捜したところ、実際に津波石を発見した。

赤崎町外口にある津波石は合足の津波石とよばれているが外口の山中にある。明治29年の三陸大津波の際、外口の住民に死傷者はいなかったが、岬の反対側に位置し、内湾になっている赤崎村合足では住民の6割が亡くなった。その遺体は津波石がともに外口に流れ着

き、そこで遺体は焼かれたという。合足で育った90代の千代さんは津波石を「空の墓だ」と説明した。

田野畑村羅賀には明治の三陸大津波、田野畑村ハイベ海岸に東日本大震災の津波石と計2つある。田野畑村は海と山に囲まれ米作に不向きな土地であるため漁業、農家、酪農とともに観光にも力を入れている。津波石はNPO 法人体験村・たのはたネットワークの体験活動である大津波語り部&ガイドの一環として案内されるが、羅賀の津波石は震災遺構として、ハイベ海岸にある118トンの津波石は、三陸ジオパークに存在する田野畑村特有の腰廻地層など地層や地球の成り立ちを説明する科学の分野で説明される。こういった観点で話していくことが良いか、案内する語り部自身も迷いがあるとのことだった。

気仙沼唐桑の津波石は2011年の津波であがった。説明してくれた元漁師のYさんは津波石に対して信仰心はないと言いながら、流れ着いた布袋様の像などまとめて、その海岸で祀っている。そして、津波石のことをヨリモノと呼び、エビスの名前をだしてヨリモノの説明をした。

津波石はそれぞれの土地の風景の中で、その歴史や実情に応じて語られ、1つの型で説明することはできない。漁業が盛んな地域ではエビス信仰や竜神信仰が関わることがある。多くの被災者が出た場所では鎮魂が意識される。観光や学習対象として見る動きもある。しかし、どの場所においても震災遺構として残そうとする動きが確認できた。

② 感想

時間の関係もあり、発表に対する南開大学からの質問等はなかったが、災害についての発表であり、ある程度関心をもって聞いていただけたかと思う。

③ シンポジウム全体の内容と感想

日中合同のシンポジウムとはいうものの、日本文学や日本の文化に注目した発表が多く、知っているようで自分が今まで持ち得なかった視点を提示され興味深かった。

例えば、金正琳氏の「日本語におけるモンゴル語からの借用語について」は、母音の音律的变化に着目したものであった。今まで自分の言葉を音韻として意識したのは、学生時代、大野晋によるタミール語の研究を読んだとき以来であり、文化の横断について考えさせられた。また、郭偉京氏による「近代日本国定教科書における『忠君愛国』教育の変遷」や葛慧俊氏の「戦時下の中国華北地域における日本語教育の一側面」など、日本の研究者からは研究されることのない視点であった。若い世代が、なかなか理解が進まない日中関係に学術研究として切り込み、分析考察することは敬意に値することだと考える。

どの教授、学生も丁寧であり、歓迎しようとする気持ちが感じられ好感をもった。また、日本語を話せる学生が多く、食事会でのコミュニケーションも楽しく時間を過ごすことができた。

2、中国滞在時での感想

日本の文化との違いに戸惑うことはいくつかあった。

まず、買い物では空港以外カードが使えないことは不便に感じた。現地ではスマホ決済が大部分であり、市場でもお年寄りの方もスマホで払っているのを見て文化の違いを感じた。偽札や泥棒の被害を考えれば、現金取引より安全であることは確かではある。やがて日本も現金取引は少なくなるのだろうとは考えたが、国際的に使える VISA など普及した方が良いようにも思う。コロナの流行以来、外国からの旅行者に対しての警戒が強くなったのだと考える。

【4】藤原 美樹

〔出張期間〕

令和6年9月14日（土）～令和6年9月17日（火）

〔出張先〕（国 / 地域・都市等詳細）

中華人民共和国天津市

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕

國學院大學・南開大学院生フォーラム「第10回東アジア文化研究国際シンポジウム」

【報告事項】

2024年9月に開催された「第10回國學院大學・南開大学院生フォーラム東アジア文化研究国際シンポジウム」に参加し、研究発表を行った。会場は中国・天津市の南開大学外国語学院で、主催は南開大学日本語文学科東アジア研究センター。

■日程

9月14日（土）：北京空港到着後、天津市・南開大学へバス移動。到着後会食。

9月15日（日）：院生フォーラム。午前中は開会式・記念撮影の後、南開大学外国語学院および國學院大學教員による基調講演、若手研究者学術フォーラム。午後から四つの分科会に分かれ大学院生による研究発表が行われた。今回

の発表者は合計18名（國學院大學からはオンラインも含め8名）。総括・閉会式後、南開大学食堂にて交流会。

9月16日（月）：エクスカージョン（南開大学より案内者同行し、バスで「万里の長城」および「独楽寺」を訪問。天津市内で会食。）

9月17日（火）：帰国

■発表の内容

報告者は分科会3において、『折口信夫「まれびと」論の受容と展開』と題して発表を行った。

「まれびと」論は、折口以降どのように展開したのか。具体的な民俗祭祀としての来訪神研究は、民俗学・文化人類学の分野において、フィールドワークを中心に1980年代ごろまでは盛んに行われた。それらは「まれびと」論の継承も批判も含むが、折口理論の影響下にあったことは確かである。一方折口の「まれびと」論は、早い時期にウィーン大学の岡正雄により「異人」論としてヨーロッパに紹介された。岡は「まれびと」を「異人 (Fremde)」としてとらえ、それを自身の古代日本の文化形成理論に適用した。より古層である母系的先住種族の社会においてマレビトが出現し、それは男性による秘密結社を特徴とする。さらにメラネシアやポリネシアの事例と日本文化とのつながりを示唆したが、これは折口理論のさらなる展開の一つと言える。

また岡の弟子であるアレクサンダー・スラヴィクは、日本とゲルマンのマレビト祭祀を比較研究したが、ゲルマンにおける民俗祭祀との対比により、「まれびと」論が新たな視点で捉え直されている。さらにスラヴィクは「来訪者」文化複合と靈魂論のつながりを指摘しており、これはエリアーデの「永遠回帰の神話」でも時間の循環と靈魂の関係の中で引用された。折口「まれびと」論の、ヨーロッパにおける間接的影響とあってよい。

岡正雄の「異人」論は、初期柳田国男の山人論との深い関係があり、また秘密結社への注目は折口の関心とも重なる。「まれびと」論生成における柳田—折口の関係は、岡の「異人」論を介することでより鮮明になるのではないか。さらに、秘密結社という岡のテーマと折口の「まれびと」論との重なり、スラヴィクの「まれびと」と靈魂論の係わりなど、当時のウィーン学派の動向から、「まれびと」論の受容と展開さらには世界的な意義を確認することができる結論した。

質疑については、柳田国男は最後まで折口の「まれびと」論を認めなかったが、それについて報告者はどのように考えるかという質問をいただいた。回答として柳田と折口はテーマは同様でも、柳田があくまでも実証的な「歴史」的次元に留まるのに対して、折口

は「神話的」な文化理論を構築している点が根本的に相違するとしたが、この点については改めて考えてみたい。

今回の東アジア文化研究学術シンポジウムは、報告者にとって初めての国際学会であり、発表内容を決定する際にも多くの試行錯誤があった。海外での発表においてどのように伝えるかささまざまな課題が残ったが、貴重な経験をつむことができた。次の機会に生かしたい。今回の発表については、後日「東アジア文化研究」に投稿する予定である。

■シンポジウムの感想

分科会1および3における、南開大学院生によるテーマは、『今昔物語集』巻五「僧迦羅五百人商人共至羅刹国語第一」に関する一考察、『玄奘三蔵絵』における異形のイメージ、『頼山陽竹枝詩の特徴—紀行竹枝の位置づけを中心に—』、『訓蒙図彙』における空想上の生き物、『里見岸雄の日蓮主義思想について—生命・国体・アジア主義』等であった。さまざまな角度から日本研究が行われていることを感じた。日本側、中国側それぞれの研究分野が多岐に渡ることや、時間的制約もあり、個々の発表について院生同士の質疑応答や議論はやや少なかったように思われる。また前半の発表において一部時間が大幅に超過したことも、後半の質疑の時間に影響が出たようだ。シンポジウム後の交流会では中国の学生との対話が行われたが、食事を共にしながら短時間ながらも友好を深めることができたのではと思う。滞在中は、エクスカッションでの丁寧なご案内や会食も含めて、王凱副教授をはじめ南開大学関係者の方々に大変お世話になり、この場で心よりお礼申し上げます。

【5】 神村友大

〔出張期間〕

令和6年9月14日（土）～令和6年9月17日（火）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）

中国・天津市

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕

第10回国學院大學・南開大学院生フォーラム 於：南開大学外国語学院

〔報告事項〕

本発表の題目は「『橘嘉智子伝』にみる古代の皇后観—市を手がかりとして—」である。

本発表は、國學院大學大学院にて金曜日の五限に開講されている「日本史研究B I」におけるレポートを下地としたものである。当開講科目では佐藤長門教授を中心に『日本文徳天皇実録』の校訂に取り組んでいるが、そこに「橘嘉智子伝」が相当な分量を割いて載録されており、レポートの執筆時には伝記の叙述に着目し、その叙述背景および日本古代における皇后の理想的観念について検討を試みた次第である。以下、本発表の目的について述べる。

『日本文徳天皇実録』は元慶3年(879)に成立し、文徳天皇(在位850-858年)の治世を記した正史である。文徳天皇の祖母嘉智子は、弘仁6年(815)に嵯峨天皇の皇后となり、嘉祥3年(850)5月4日に冷泉院において65年の生涯をとじた。

嘉智子は橘氏を出身とする初の臣下皇后であったが、日本古代における臣下皇后の初例としては、聖武天皇(在位724-749年)の皇后であった藤原安宿媛(光明子)が知られている。嘉智子の人物像や事蹟を記した「嘉智子伝」は、『日本文徳天皇実録』嘉祥3年(850)5月壬午(5日)にみえるが、その史実性は別として、伝記にみられる逸話の数々は、当該期の皇后に求められた理想的観念を考えるうえで重要な視座を与えてくれる。

従来行われてきた「嘉智子伝」に関する研究は、その仏教的性格が注目され、当該期の仏教を媒介とした対外交渉などの観点から分析した論考が多く、それ以外の叙述について個別具体的に検討した研究はあまり多くない。そこで、私見は「嘉智子伝」に窺知される数々の仏教的要素以外の叙述に対して目をむけるなかで、古代において市場と皇后との密接な関わりを示唆する叙述がなされていることに注目し、そこから古代の皇后に求められた役割について検討した。以下にその概要について述べる。

皇后と市場の関係性については、いくつかの先行研究によって『周礼』の理念の影響が注目されているが、皇帝との関係をめぐる議論に終始しており、市場に注目した研究は少ない。近年では遠藤慶太氏によって「嘉智子伝」と「光明皇后伝」にみえる市の存在が明らかにされ、両伝の思想の類似性が指摘されているが、「光明皇后伝」にみる市場と皇后の関係性は『周礼』の思想とはやや乖離したものであり、「嘉智子伝」の市場の記載については別途考察する必要性があろう。

そこで私見は、『周礼』天官冢宰・内宰条を中心に改めて史料解説を試みた、その結果、皇后は陽に位置づけられた天子の対偶として陰をつかさどる存在とみなされ、市場の設置もかかる陰陽二元論的思想にもとづいて形成されたと考えられる。しかし、皇后は市場の設置に関与はするものの、度量・淳制などについては官僚機構たる内宰職が管理するものとされ、皇后は一切干渉しなかった。この点との比較から、「光明皇后伝」の認識と『周礼』の認識にズレを見出すことができ、遠藤説には再考の余地があることを指摘した。

『周礼』を分析してみると「陰礼」という語が散見されることに気づく。皇后と嬪が学ぶべき教養であった陰礼は嬪主導のもとで後宮女性の教育に用いられたが、皇后は陰礼にもとづいて市社で祭祀を行うこととされた。この点からも皇后と市場との密接な関わりを看取できるのであるが、古代中国の皇后伝についてみていくと、陰をつかさどる存在としての皇后像の形成は伝記の叙述における重要な要素として共有されていたと考えられる。その一例として「陰教」があった。

「陰教」は「嘉智子伝」にもみられるが、近年では勝浦令子氏によって後宮の女子教育であることが指摘されているが、『周礼』や『周書』などの分析から、後宮を束ね、王化を邦国に行き渡らせ、自らの徳を高めることと解するのが穏当と考える。したがって、皇后は嬪とともに陰礼の学び手ではあったが、後宮女性の教育は嬪に委任し、自らは祭祀に奉仕した。そして皇后は自身の徳でもって国家の永続のために尽くすことが求められたと考えられる。

以上の検討から、「嘉智子伝」の叙述はこれまで仏教的性格が強調されてきたが、皇后と市場との関係について検討するなかで、その背後にある「陰礼」や「陰教」などといった陰陽二元論にもとづく儒教的理念を利用していることが明らかになり、中国的皇后観の影響を強く受けたことが再認識された。かかる視点にもとづく皇后像は、現在の日本古代の皇后研究においても重要な課題となっている「しりへの政」などをめぐる皇后の役割についても何らかの視座を与えるものとして期待できるのではあるまいか。今後の課題とする所存である。また、発表後に参加された先生方・院生方から貴重なご意見・ご質問を受け、本発表内容の根幹にかかわる重要な指摘をたまわり、新たな課題を得ることができたことは幸甚の至りである。今後も研鑽を積んでいきたい。

【6】松本 佐和子

〔出張期間〕

令和6年 9月 14日（土）～令和6年9月17日（火）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）

中国天津市

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕

第10回南開大学・國學院大學大学院生・若手研究者学術フォーラム東アジア文化研究国際シンポジウム、南開大学外国語学院

〔報告事項〕

本学会では「平安期における天皇の追善供養－七ヶ寺の記載を中心に－」をテーマに報告させていただいた。七ヶ寺とは、天皇崩御後に法会をおこなった七カ所の寺院のことで、天皇の初七日～七七日に七ヶ所の寺院で法会がおこなわれた。追善供養が寺で行われるようになったのは、持統期のころであると考えられており、天武天皇の死後百日目にあたる朱鳥元年に五寺（大官、飛鳥、川原、小墾田豊浦、坂田）で無遮大会を設けているのが初見である。奈良時代においては四大寺や七大寺などの官寺で行われることが多かったが、平安時代になると四大寺・七大寺などの記載はみられなくなる。さらに「近陵七ヶ寺」「七ヶ寺」などのような記載にかわり、天皇ごとに追善供養を行う場所が異なるようになる。七ヶ寺について具体的に検討した先行研究はなく、国忌の観点から追善供養場所（七ヶ寺を含む）に少し触れているのみであり、実施された寺院それぞれの成立過程などについての研究はあるものの、位置関係についての論考は管見の限りない。平安時代に出現するようになる七ヶ寺は、どのように選定されているのか、その七ヶ寺は固定しているのか、あるいは天皇ごとに異なるのか。追善供養の場所について検討することで、平安時代の追善供養のあり方を少しでも明らかにすることを目的とした。

まず奈良時代の追善供養実施場所であるが、四大寺や七大寺といった官寺で行われており、追善供養を行う場所が固定されていたことを確認した。次に平安初期における追善供養場所であるが、具体的な場所がわかる桓武をとりあげ、記載のある5ヶ所の寺院（佐比・鳥戸・崇福・大安・秋篠）の場所と桓武との関係について史料からみた。検討の結果、桓武との関係を直接的に示す史料がないものもあるが、何らかの関係がある寺院あるいは息子である平城（皇太子）と深い結びつきがある寺院であることがわかった。また桓武の山陵と5ヶ所の位置関係についても山陵の周辺の寺院ではなく、桓武のルーツあるいは平城に関係する寺院が選定されていたと考えられることを指摘した。

次に「七ヶ寺」の記載が初見するのは淳和天皇の初七日のときからであること、『六国史』における「七ヶ寺」の記載があるのは淳和・仁明・清和・光孝であること、七ヶ寺の記載をみると「近陵」の記載の有無がみてとれることを指摘したうえで、中でも七ヶ寺の具体的な記載がある仁明天皇と清和天皇について、それぞれの寺院と天皇との関係についてみていった。

まず仁明天皇について。仁明の七ヶ寺は「近陵七ヶ寺」と記載したうえで、紀伊・宝皇・来定・拝志・深草・真木尾・檜尾であることが明記されているが、これらの寺院は詳細な場所が分からず、かつ現存している寺院もない。仁明の山陵との位置関係についてみてみると、真木尾寺は少し離れているが他の寺院は近陵であることがわかった。これらの七ヶ

寺と仁明天皇との直接的な関係を示す史料はないため、単に山陵に近い寺院が選ばれていたのではないかと考えた。

次に清和天皇について。清和の七ヶ寺は「七ヶ寺」と記載したうえで粟田・常寂・禪林・貞観・円覚・観空・水尾山であることが明記されている。詳細不明である常寂寺を除いた他の六寺については、清和が宿泊した寺であることや出家した寺あるいは亡くなった寺などといった清和と深い関係がある寺院であることを明らかにした。さらにこれらの七ヶ寺と清和の山陵の位置関係を地図上におとしてみたところ、すべての寺院が近陵とは言い難いため清和の七ヶ寺の記載には「近陵」とはしなかったのではないかと指摘した。

以上、平安初期における天皇の追善供養諸寺の選定の仕方をみてきた。桓武は山陵の近辺ではなく桓武関連の諸寺であること、仁明は山陵に近い寺院、清和は天皇個人と関係の深い寺院であることが明らかになった。これらを踏まえたうえで「近陵」の記載の有無に関していうと、天皇との関係よりも単に山陵に近い寺院については「近陵」の記載があり、記載のない七ヶ寺については近陵ではなく天皇との関係が深い寺院であると考えられることを指摘した。

今回は私自身はじめての学外報告、さらに中国での報告ということで、母国語での報告とはいえとても緊張した。専門外の内容であるにも関わらず、幅広い視点からの貴重なご指摘・ご意見をいただくことができ、新たな気付きを得ることができた。また現地の大学院生の報告内容もバラエティに富んだとても興味深いものばかりであり、学びの多い大変有意義な時間であったとともに改めて日本の魅力に気づかされた。大学、国境の枠をこえたグローバルな研究報告会に参加・報告できるという大変貴重な機会を得ることができたこと、現地の学生と自身の研究について語り合うことができたこと、そして現地の様子を実際にこの目で見て触れることができたことは一生の宝である。今回の出張で得た知見を今後の研究に大いに生かしていくとともに、より一層、研究に精進していきたい。

【7】 齊藤 彩香

〔出張期間〕

令和6年2月6日（火）～令和6年2月15日（木）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）

フランス／ パリ・トゥール・ナント

〔報告事項〕

本調査は申請者の主な研究対象である『アンヌ・ド・ブルターニュの大時禱書』の注文主であるアンヌ・ド・ブルターニュのパトロネージと、本時禱書の写本彩飾を担った宮廷画家ジャン・ブルディションに関わる作品の実見と資料収集が主な目的である。

アンヌ・ド・ブルターニュに関する調査として、出身地及び幼少期を過ごしたブルターニュ地方の都市であるナントやレンヌ、シャルル8世との婚姻後に過ごしたロワール川沿いの居城へはトゥールを中心に訪問した。また、『アンヌ・ド・ブルターニュの大時禱書』制作以前のブルディションの板絵、同時代の芸術家（画家・細密画家・彫刻家）の作品の実見のためパリの美術館、教会に足を運んだ。

本調査では、はじめにパリを訪れた。パリでは中心部から北に10キロほど離れたサン＝ドニにある歴代フランス国王・王妃の墓所であるサン＝ドニ大聖堂と、さらに10キロほど北東にあるゴネスのサン＝ピエール・サン＝ポール教会に作品の実見のために訪問した。サン＝ドニ大聖堂では、アンヌ・ド・ブルターニュとルイ12世、アンヌの娘クロード・ド・フランスとフランソワ1世の墓をみることができ、外壁部は補修工事中だったものの、地下の礼拝堂・納骨堂等を見学することができた。一方で、ゴネスのサン＝ピエール・サン＝ポール教会では改修工事中のために内部に入ることが叶わず、ブルディションまたは周辺画家の手によるとされる板絵を見ることはできなかった。パリ市内ではブルディションに近い画家の作例としてステンドグラスを実見・撮影するためにサン・ジェルヴェ・サン・プロテ教会（Saint-Gervais-Saint-Prottais）を訪れた。ここでは一部のステンドグラスの撮影は可能だったものの、一部改修工事中であった。しかし、ブルディションの周辺で活動したゲッティ文書の画家と同一視される画家ノエル・ベルマーレの作例とされる祭壇画があることがわかった。また、コンデ美術館では、トゥール派の祖とされ、宮廷画家としてはブルディションの前任者であるジャン・フーケの作品を見ることができた。この他、ルーヴル美術館やクリュニー中世美術館等を訪れ、パリを離れた。悪天候と交通機関の乱れにより、計画していたすべての教会等を訪問することはかなわなかったものの、限られた時間のなかで多くの作品を実見し撮影することができた。

次にトゥールに滞在し、アンヌ・ド・ブルターニュにゆかりのあるランジェ、ブロワ、アンボワーズ等のロワール川沿いの街と古城を巡った。また、先行研究においてブルディションもしくは工房作とされる板絵の実見のためトゥール美術館（Musée des beaux-arts de Tours）を訪れた。アンヌがシャルル8世と婚約したランジェ城、シャルル8世の時代に庭園が造られルイ12世の時代に拡大された庭園のあるアンボワーズ城と、そこからほど近くアンヌの居城となったクロ・リュセ城、そしてルイ12世の居城ブロワ城を見学

し、15-16世紀に制作されたタピスリーを数多く見ることができた。また、トゥール美術館ではブルディジョン作とされる板絵（2点）の実見・撮影をすることができた。トゥール市内での複数の教会を巡り、ブルデジョンら15世紀末の芸術家が目にすることができたであろうステンドグラスや教会建築の実見に努めた。サン・ガティアン大聖堂(Cathédrale Saint-Gatien de Tours)では、シャルル8世とアンヌの幼くして亡くなった子どもたちの墓があり、ミッシェル・コロンブ（ジャン・コロンブの兄弟）周辺の彫刻家の手による彫像を見ることができた。ナント大聖堂にあるブルターニュ公フランソワ2世(アンヌの父)の墓も、この子どもたちの墓と同じく、ジローラモ・パチャロットによって造られた台座とミッシェル・コロンブ周辺の芸術家による彫像という組み合わせで構成されており、こちらは今回の訪問では見ることが出来なかった。そのため、トゥールでミッシェル・コロンブに近い作例を実見・撮影できたことは幸いであった。

最後に、アンヌが幼少期を過ごしたブルターニュ地方の中心地であるナントに滞在し、レンヌにも足を運んだ。ナントではアンヌの出生地であるブルターニュ公爵城の他、教会、美術館・博物館等を訪れた。ナント滞在での目的のひとつであったアンヌの心臓の納められた聖遺物箱は見ることができなかったものの、15世紀-16世紀初頭の作品や、ブルターニュ地方の環境、芸術家の活動について見識を広げることができた。

本調査では3都市に滞在し、アンヌ・ド・ブルターニュ、ジャン・ブルディジョンに関連する地を歩き、多くの同時代の芸術作品に触れることができた。特に、ステンドグラスやタピスリー、彫刻といった作品は現地でなければ見ることのできない作品が多く、貴重な機会であった。今後この調査で得られた資料を基に研究を進めていく所存である。

【8】富田 綾美

〔出張期間〕

令和6年11月1日（金）～令和6年12月26日（木）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）

台湾 台南市及び高雄市、嘉義縣等

〔報告事項〕

令和6年度大学院国際交流旅費補助を活用し、台湾台南市及び高雄市等において現地調査を行ったため以下のとおり報告する。

調査期間は11月1日から12月26日まで、調査対象は台南市等で道士が行う道教儀礼及び

その周辺に見られる現地の習俗である。筆者は2018年から継続してこの地域で調査を行っており、今回の調査も懇意の道士等から情報を収集し、儀礼の調査を行った。

今回調査することのできた事例は以下のとおりである。

【台南曾文溪以南地域の道士による儀礼】

- ・ 高雄市茄苳區萬興廟における慶成醮（廟の修建を祝う儀礼）三朝
- ・ 茄苳區崎漏個人宅における尾旬功德（死者救済儀礼）三朝…一部儀礼のみ
- ・ 台南市南區殯儀館における頭七開通冥路（初七日の儀礼）
- ・ 高雄市第一殯儀館における火葬
- ・ 南區殯儀館における頭七開通冥路
- ・ 崎樓順守府における謝恩醮三朝…第二日まで
- ・ 南區喜樹萬皇宮における禳災醮（王爺醮）三朝…神明の指示により「三朝」（約3日間）の儀礼という名目だが、元来の決定により5日間の道教儀礼が行われた。
- ・ 台南市東區關帝殿における謝恩醮七朝…第一日の儀礼のみ調査。
- ・ 高雄市永安區天后宮における謝恩醮七朝…醮壇内女人禁制のため一部儀礼のみの調査。

【台南曾文溪以北地域の道士による儀礼】

- ・ 嘉義縣義竹鄉新竹紹徽宮における謝恩醮七朝…神明の指示により併せて天醮・地醮を行う。計九朝。醮壇内女人禁制のため、外からの調査。
- ・ 台南市中西區東嶽殿における尾旬功德靈前繳（半日の死者救済儀礼）
- ・ 南區殯儀館における尾旬功德靈前繳

【高雄地域の道士による儀礼】

- ・ 台南市永康區中樓勝安宮における謝恩醮五朝…醮壇内女人禁制のため聞き取りによる調査。
- ・ 台南市仁徳區中洲玄天宮における謝恩醮五朝…醮壇内女人禁制のため一部儀礼のみの調査。
- ・ 高雄市阿蓮區崗后宮における謝恩醮五朝…醮壇内女人禁制のため一部儀礼を廟外より調査。

【台湾北部地域道法二門の道士による儀礼】

- ・ 台中市大甲區大甲鎮瀾宮重修慶成祈安七朝清醮…鎮瀾宮を含めて七つの壇（玉皇壇（鎮瀾宮）、媽祖壇、觀音壇、天師壇、北極壇、神農壇、三官壇）を設け、台中及び北部の道士に依頼して儀礼を行った。主に觀音壇と天師壇を調査。

【仏教式の儀礼】

・南區存心堂における仏教式功德…存心堂は現代式の宗教施設としてセミナー開催等の社会活動を行っている。この事例では、依頼を受けて和尚を招き、二家族のために死者供養の儀礼を行った。

他に、この期間中何度か南區殯儀館の和平堂及び永安堂（棺桶や位牌、遺影を置いて殯する施設）を見学し、道教・仏教式設備の分布等を調査した。

今回の調査の特徴は、その調査対象が多岐に渡ったところにある。筆者は従来台南曾文溪以南地域の道士と懇意にしており、この地域の儀礼を中心に調査を行っていた。しかし、今回知人の紹介により、曾文溪以北地域の道士と知り合うことができ、彼の関わる儀礼を数件見学し得た。

また、他の知人の紹介により、大甲鎮瀾宮の儀礼について調査する機会を得た。この儀礼を行った道士達は道法二門或いは正一と自称する系統の道士であり、主に中北部でしか活動しないため、筆者はこれまで見学する機会を得なかった。一事例だけの調査ではあるが、道士の特別の許可により、筆者が特に関心を持つ灯儀の科儀書（道士がこれを見て儀礼を進行する本）の内容を撮影させていただくなど、収穫の多い調査となった。

主に高雄地域では、女人禁制の習慣のため調査に制約が加わった事例がいくつかあった。しかし、現在においてもこうした習慣が強く守られていることもまた、地域の特徴として興味深い情報である。また、外部からの調査によって得られた資料も少なくない。

台南市南區の存心堂は知人から紹介された施設であり、11月半ば以降筆者の居候先でもあった。存心堂は雷神である普化天尊を主祭神とするが、主人達の信仰は仏教寄りであり、かつ法師として厄払い等の小法事も行っている。この主人達は筆者と同年代であり、宗教観や文化、教育等について、日台を比較した議論を日々行わせていただいた。台湾の比較的若い世代の考え方を伺えたことは、筆者にとっても大変刺激となった。また、存心堂にとっても日本人から見た台湾の信仰文化とは興味深い題材であつたらしく、帰国前には彼らの知人を招いて若干の成果報告を行わせていただいた。筆者の拙い発表によって、多少でも彼らの懇意に対して還元ができたのならば幸いである。

今回の約2か月間という長期にわたる調査では、台湾現地の方々のみならず、日本の先生方、同級生等、本当に様々な方からお世話になった。この場を借りて心から感謝申し上げます。